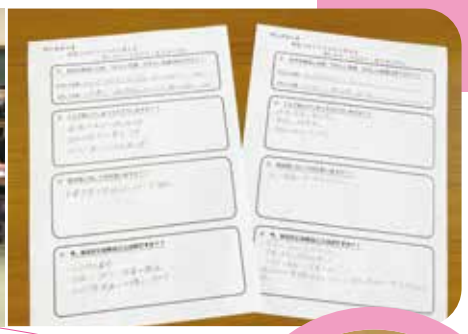
令和3年4月1日発行　毎月1回1日発行　ボランティア情報　昭和52年11月12日第三種郵便物承認

ボランティア・市民活動のコーディネーター・リーダー等推進者のための

ボランティア情報

2021
4月号
no.527



福祉教育わたしの実践

熊本県 山鹿市社会福祉協議会
相談支援係 主任
上村理恵（うえむらりえ）さん

【　福祉への興味につながる「楽しい」福祉教育を大切に　】

山鹿市社協は、これまで高齢者サロン交流や疑似体験等の体験型学習に力を入れてきましたが、コロナ禍により別の形の福祉教育を模索することになりました。そうしたなか、上村さんが取り組んだのが「コロナ差別」をテーマに全社協・全国福祉教育推進委員会が作成した福祉教育教材「あなたのまちでやさしさをひろげるために」を活用したプログラムの実践です。昨年12月、同市にある城北高校の医療福祉科1年生20名を対象に50分間のプログラムを実施しました。

高校の担当教諭から「生徒は書く時間を与えるとしっかりと考えることができる」と助言され、上村さんはワークシートを用意し、「感染者に対して何を思いますか？」など4つの質問について意見を書く時間を設け、3、4人ずつ発表してもらうことにしました。さらに、本テーマをより身近に感じてもらえるよう、山鹿市で実際に起きたコロナ差別のエピソードを解説に取り入れました。

プログラムの実践にあたり、上村さんが特に意識したのは「生徒に共感すること」です。「発表の内容がこちらの意向と違っても否定せず、発表してよかったと思ってもらえるよう心がけました」と上村さん。

上村さんは、生徒がどのような反応を示すか不安もあったそうですが、「想像以上に真剣に受け止め、深く考えてくれました」と手応えを語ります。また、「同行した同僚にも好評で『自分も実践したい』と言ってもらえたこともうれしかったです。福祉教育は皆で取り組まなければ広がりませんから」と笑顔を見せます。

上村さんは、福祉教育について「福祉の入口として、子どもにプラスの感情を持ってもらえるようにしたい」と語ります。実は、上村さんは、小学生の時に福祉教育で訪問したデイサービスでの体験が楽しく、それが今の仕事を目指すきっかけになったそうです。「福祉教育を楽しいと感じられることが、子どもの福祉に対する興味や人への優しさにつながります。このことを職員の共通認識とし、学校の教員とも情報交換をしながら取り組んでいきたいですね」と意気込みを語ってくれました。

Contents

P.2▶ 特集 地域共生社会づくりに向けた大学VC・社協VCの連携を考える
P.6▶ 社会課題に挑む　母子支援を通して広がる、地域の支援の輪と子どもの未来
P.7▶ 必見！仕掛け人！ノウハウを学ぼう！　P.8▶ インフォメーション ｜ 読者のひろば

ふれあいネットワーク
社会福祉法人 全国社会福祉協議会

特集

座談会

地域共生社会づくりに向けた大学VC・社協VCの連携を考える
～コロナ禍での活動を通して～

近年、大学ボランティアセンター（以下、大学VC）と社協ボランティアセンター（以下、社協VC）との連携が全国各地で進んでいます。大学生ならではの柔軟な発想を活かしたプログラムは、地域課題を解決する大きな力になっていましたが、コロナ禍によりこれまで通りの活動が困難になっています。

今、大学VCと社協VCではどのような工夫をしているのか。今後どのような活動を行っていくのか。オンラインで話し合いました。

参加者

大学ボランティアセンター

●中央大学 ボランティアセンター［東京都］
開澤（かいざわ） 裕美（ひろみ）さん

●愛知淑徳大学 コミュニティ・コラボレーションセンター［愛知県］
秋田（あきた） 有加里（ゆかり）さん

社協ボランティアセンター

千種区社協マスコットキャラクター「ユーカリーナ」

●日野市社会福祉協議会 ボランティア・センター［東京都］
宮崎（みやざき） 雅也（まさなり）さん

●名古屋市社会福祉協議会 ボランティアセンター［愛知県］
野川（のがわ） 祐史（ゆうじ）さん

●名古屋市千種区社会福祉協議会 ボランティアセンター［愛知県］
吉岡（よしおか） 弘（ひろし）さん

〈進行役〉東京都社会福祉協議会 東京ボランティア・市民活動センター［東京都］
熊谷（くまがい） 紀良（のりよし）さん

地域とつながる社協と、学生の「感性」を活かして

熊谷　まずは、大学VCの活動概要や、社協VCの関わりなどについてお話しください。

開澤　中央大学VCは2013年に設置され、現在、7つの公認学生団体に約200人の学生が在籍しています。

設立以来、東北・岡山・熊本などの被災地でコミュニティ支援を行っています。本学の多摩キャンパスがある八王子市と日野市でも活動を行っており、なかでも「チーム防災」という公認学生団体は、日野市で地域防災の大切さを伝える活動を活発にしており、日野市社協VCの宮崎さんにはいつもアドバイスをいただいています。また、文京区の後楽園キャンパスでは、理工学部の学生たちがVC公認学生団体「りこボラ！」を設立し、100人を超えるメンバーが活動しています。

さらに、中央大学や日野市社協VCなど7団体によるネットワーク「ボラネット多摩」で、毎年「3.11」の前後に、地域防災力の向上をめざすイベントを行っています。これは7年ほど続けており、年4、5回は担当者の皆さんと集まる機会があるため、よい関係を築けていると思います。学生たちも、他大学の学生と交流することで刺激を受けています。

熊谷　「りこボラ！」の学生は、東京ボランティア・市民活動センター（TVAC）にもいらしてましたね。

開澤　中央大学はVCが多摩キャンパスにしかないので、学生が身近に相談できる大人ということで、TVACや文

地域住民に紙食器のつくり方を伝える「チーム防災」

「りこボラ！」のごみ拾い活動。後楽園キャンパス周辺にて

情報提供

社協ボランティアコーディネーター・ハンドブック』公開（神奈川県社協かながわボランティアセンター）

2021年2月発行、社協ボランティアセンター/コーディネーターの役割、機能、仕事を見つめ直し、今後に向けた課題整理、目標設定を行う、社協VC職員必読のハンドブック。ダウンロード可能。（詳細は「神奈川県社協」で検索（4月6日「お知らせ」から））

京区社協VCの皆さんに相談に乗ってもらっています。

宮崎　中央大学の皆さんとの出会いは、東日本大震災のボランティア派遣で宮城県気仙沼市の大島に行ったときのことです。以来、中央大学でVCを立ち上げることになった時からずっと一緒に活動してきた印象があります。

また「ボラネット多摩」は、学生たちのよい出会いの場となっています。今は、学生が自主的に行っている活動を、私たちが下支えする形になっています。

秋田　愛知淑徳大学にコミュニティ・コラボレーションセンター（以下、CCC）が開設されたのは2006年です。現在、在学生約9,000人のうち3割の学生がCCCに登録し、約30の学生団体が活動しています。

これまで、大学の敷地内やデイサービスセンターなどで、定期的にカフェを開いて地域交流の場づくりをしたり、東日本大震災の被災者支援などを行ったりしてきました。

被災者支援では、当時、被災地の状況を踏まえ、大学として学生が被災地を訪れての活動はしばらく見合わせることとしました。そのため、名古屋市社協VCとタッグを組み、名古屋市内に避難した広域避難者と家族の支援を行いました。例えば「なごやであそび隊」という団体は、避難者世帯の子どもたちと一緒に、東山動植物園やトヨタ産業技術記念館に出かけたり、毎月、大学内で学習支援を行い、その後、皆で料理をして一緒に食事をしたりしてきました。

また、千種区社協VCの協力を得て、区ボランティア連絡協議会のメンバーと学生との交流会も何度か行いました。

こうした活動のなかで、社協VCには、活動を進める上でのさまざまな準備や広域避難者の皆さんの情報集約など、多方面で協力を得ています。私から見ると、社協VCは「地域とつながる先生」です。私たちの活動は、社協VCがあるからこそ成り立っているのだと感じています。

名東区・千種区ボランティア団体との交流会
（2019年開催）

野川　名古屋市社協VCでは、東日本大震災で被災し、名古屋市に移住された132世帯の皆さんの交流の場として「お茶っこサロン」を開催しています。愛知淑徳大学や名古屋工業大学の学生には、学習支援など、さまざまな形でご協力いただいています。

また、「ボランティア活動の促進協働会議」では、名古屋市や名古屋市社協、企業、NPO、大学が協働し、ボランティアをしたい人と、必要としている団体とのマッチングイベント「ぼらマッチ！ なごや」を開催しています。

さらに、「なごやか地域福祉・大学ラウンドテーブル」では、市内10大学の担当者がつながり、若者のボランティア活動や地域貢献への意欲を高めるための話し合いをしています。コロナ禍の前までは、学生が知的障害者やシニアの方々と一緒にボッチャを楽しむ会を開催していました。

こうした行事を企画するなかで感じるのは、参加前の学生たちの気持ちをきちんと受け止め、参加後は学生たちを次の活動へ丁寧につなげてくださるのが、CCCをはじめとした大学VCの方々になります。

吉岡　千種区社協では、第4次活動計画を作成する際、愛知淑徳大学の学生5人に参加していただきました。その学生たちがつくってくれたのが、千種区社協のマスコットキャラクター「ユーカリーナ」です。このキャラクターを用いて、SNSを活用した地域に対する福祉情報の発信や、グッズ制作など、しかけづくりに熱心に関わってもらいました。共同募金の実績が増加したのも、これらの取り組みが理由の一つかもしれません。

また、コロナ禍の前には、学生と高齢者サロンでコーヒーを淹れ、歌や体操などの介護予防活動に取り組む「珈琲ボランティアあじさい」のメンバーが一緒になり、大学構内でサロンを開催しました。あじさいメンバーの多くは高齢者の男性で、学生と一緒に活動することで元気をもらったと大変喜んでいました。コロナ禍が落ち着いたらまた行いたいと思います。

ほかにも、学生とともに小学生の福祉教育にも取り組んでいます。内容は、紙芝居を使い認知症の理解促進を図っていくもので、地域包括ケアの取り組みにも位置づけられています。千種区には大学が多いので、さらに多くの大学とつながり、企業とも連携しながら今後は地域の困りごとを解決していきたいと思っています。

熊谷　学生の感性や発信力を、地域の活動に取り入れることは大きな力になりますね。学生にとっても、学びにつながる部分が多いと思います。

コロナ禍だと諦めずに工夫して「できること」を

熊谷　ここからは、コロナ禍によりできなくなったこと、あるいはコロナ禍だからこそできたことや気づいたこと、さらには学生の様子などをお話しいただきたいと思います。

開澤　2020年度は、学生はオンライン授業が中心で、課外活動もほぼ自粛となりました。VCも、可能な範囲で活動をオンライン化し、同時に新しい講座を企画・運営する日々でした。

しかし、少しでも対面活動をしたいと考え、感染対策をしながら昨年12月と今年3月に1回ずつ、多摩キャンパスと後楽園キャンパス周辺で清掃活動を実施しました。また、後期からの新たな講座開設に向けて、学生に企画から参加してもらいました。その結果、ファシリテーション講座や講演会など46講座を実施し、783人の学生が参加しました。

さらに今年3月には、日野市社協VCの協力を得て、認知症サロンカフェと放課後の学童で計3回、オンラインボランティアを行いました。学生はようやく「誰かのために貢献できた」と実

情報提供

「災害支援用語集 サイガイペディア」を公開（全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JVOAD）、岡山NPOセンター）

災害時に被災者を支援する行政、ボランティア、民間支援団体関係者がスムーズに活動を行うため、災害に関する専門用語を解説した「サイガイペディア」を公開。（詳細は「JVOAD」で検索（3月10日「お知らせ」から））

感することができ、やりがいがあったようです。

また、「ボラネット多摩」のイベントもオンラインで行いました。トークセッションや学生が制作した動画などを1日中YouTubeでライブ配信しました。約11団体が制作した動画は、今後も素材として活用できる媒体となりましたので、学生にもよい機会になったと思います。

ほかにも、助成金で購入したWi-Fiを倉敷市社協VCに送り、それを「平成30年7月豪雨」で被災した真備町の仮設住宅に設置していただき、オンラインで2回、交流会を開催しました。

こうしたオンラインボランティアを行う際、事前ミーティングに社協VCや福祉施設の職員さんに入っていただくと、当日の内容が充実すると感じました。私や学生が不安を感じていても、社協VCや福祉施設の皆さんが前向きな言葉をかけてくださるので、全員のモチベーションが高まる場面が何度もありました。

コロナ禍でも諦めずに工夫をすれば、できることはたくさんあるのだと気づきました。

宮崎　中央大学VCのオンラインボランティアは、ボランティア先にとても喜ばれ、その後お便りもいただきました。高齢者の方も新たな体験は楽しいものですし、その上、学生が活動してくださることは、大変励みになったのではないかと思います。

熊谷　オンラインへの対応は大変でしたか。

宮崎　日野市社協でも、昨年から市民や福祉関係者の方に向けてZoomの講座を毎月行っています。その意味では、ITを活用する技術は少し上がってきていると思います。また、福祉施設ではオンラインを活用しないと利用者と家族の面会ができない状況なので、ITの活用は福祉施設にも広がっていると感じています。

秋田　CCCがコロナ禍で取り組んだことの一つに、手紙で子どもの学習支援をする「郵便先生」があります。今まで続けてきた被災世帯の子どもだけでなく、地域のひとり親世帯の子どもも対象とし、子どもたちと学生がやり取りを重ねました。子どもたちからお礼の手紙をいただき、学生たちも喜んでいましたね。

また、「まちかど保健室」を運営する名古屋市療養サービス事業団に、認知症養成サポーター講座を行っていただき、受講した学生による認知症の方へのオンライン傾聴ボランティアをスタートさせました。

それから、こども食堂を利用していた小学生を対象に、オンラインで料理教室や栄養講座も実施しました。

ほかにも、名古屋市のベトナム人技能実習生たちが、コロナ禍で就業できず、お寺に身を寄せていると知り、オンラインで日本語教室を行いました。複数大学の学生が先生となり、昨年7月から今年3月までの間、毎週日曜日に2時間行い、約150人のベトナム人の方が参加しました。丁寧に日本語を教える学生たちを見ながら、きっとベトナム人の方々は日本を好きになってくれるのではないかと感じました。

学生は上手にオンラインを活用しますが、やはり対象者との直接のふれあいを望んでいるため、つらい1年だったと思います。大学で作成している、コロナ禍のもとでの活動ガイドラインがまとまったら、感染対策に留意しながらできるだけ地域に出ていきたいと考えています。

まだコロナ禍が続きそうですが、こうしたなかで工夫をすることが、今後、学生たちが社会に出て困難に直面した時に状況を変えていく力になるのではないかと思います。

野川　「ボランティア活動の促進協働会議」では『コロナに負けない　ボランティア・市民活動の取り組み』という冊子をつくりました。これは、コロナ禍でも工夫しながら活動を継続している団体にインタビューをし、活動のポイントをまとめたものです。

また、「なごやか地域福祉・大学ラウンドテーブル」では、ボッチャ交流会ができなくても、今の状況や今後のことを話し合う場は必要であるとの思いから、何度もオンラインで意見交換をしました。

それから、先ほど秋田さんのお話にあったベトナム人技能実習生について、少し加えて説明します。名古屋市には、昨年5月に認定NPO法人レスキューストックヤードが立ち上げた「NPOおたがいさま会議」というプラットフォームがあります。これは、コロナ禍において困りごとを抱えるNPOなどの情報を共有し、課題解決の方法を模索する場で、ベトナム人技能実習生の話はこの場で出たものです。そして、ここに参加していたCCCと名古屋市社協VCが協力させていただくことになったという、マッチング事例でもあります。

吉岡　私たち社協VCが、地域で顔の見える関係づくりをしていくとき、学生の力は大きいと思うことがたくさんあります。一方で、学生も学生時代にしかできない社会活動をすることで将来の役に立つこともあるのではないか

真備町の仮設住宅の住民とのオンライン交流会

「郵便先生」でのやり取り。
中央は子どもからのお礼の手紙

ベトナム人技能実習生へのオンライン日本語教室

情報提供

DVD『ひとりも取り残さないために～インクルーシブ防災～』貸出開始（NHK 厚生文化事業団）

誰ひとり取り残さないインクルーシブ防災の実現をめざして、「避難編」「避難生活編」の２つの DVD の無料貸出を開始。地域の学習会、教育、企業の防災担当者研修会などの教材として活用可能。（詳細は「NHK 厚生文化事業団」で検索）

と思います。コロナ禍が収束したら、皆で会える場をたくさんつくりたいと考えています。

学生は地域をつなぐ「かすがい」多くの活動の機会を

熊谷　コロナ禍で手探りの部分もありますが、皆さんの話をうかがっていると、さまざまなチャレンジを進めていることがわかりました。

今後もしばらくコロナ禍が続きますが、次第に状況が改善していくであろうことも踏まえ、大学VCと地域のVCのパートナーシップへの期待をお聞かせください。

開澤　大学VCの役割は、学生の思いを形にしていくことです。これを実現するためには、地域で長年の経験やつながりを持つ社協VCの存在は欠かせません。その意味で、今はとてもよい関係を築くことができていると思います。

また、今までは活動のプログラムが多少あいまいでも、現場に行けば何とかなる部分もありましたが、コロナ禍での新しいプログラムは、そういうわけにはいきません。プログラムづくりにおいても、社協VCのサポートを受けることでうまくいくことがたくさんありますので、ぜひ今後も頼りにしたいと思っています。

宮崎　私は、学生は地域をつなぐ「かすがい」だと思っています。私たちはさまざまな地域活動の支援を行っていますが、どうしても地域に空白の部分が生じると感じています。そこを埋めてくれるのが学生です。本当に貴重な存在ですので、今後も学生が活動する際、ふさわしい場や機会を提供できるように努めたいですね。

また、これだけオンラインを活用する支援はコロナ禍の今だからこそできることだと思っているので、今後も積極的に取り組んでいきたいと思います。今年度は、地域福祉の一つとして、高齢者向けのスマートフォン講座をしてほしいとの依頼があったので、地域包括支援センターと取り組む予定です。学生の得意分野だと思いますので、協力してもらえたらと考えています。

最後にもう一つ。八王子市にある東京都立大学VCの現在のコーディネーターは、東日本大震災のときに宮城県仙台市で被災し、その経験から学生時代には日野市内の防災・減災ボランティアの学生のリーダーとして活動していた人物です。先日開催した「ボラネット多摩」のオンラインイベントでも活躍してくれました。今後も、大学VCと社協VCとの連携が、こんな人材を育む機会になるといいなと思っています。

秋田　宮崎さんの「学生はかすがい」という言葉、素晴らしいと思います。大学VCとしてうれしいことです。

先ほどと重複しますが、私たちは地域のネットワークの先生である社協VCにつないでいただくことで、日々の活動ができていると感じています。また、名古屋市社協VCで長年お世話になっている方に「他人ごとが自分ごとになる人をつくれば、将来、必ず地域で助け合える」と教わりました。本当にその通りだと思います。

社協VCとの連携を通じて地域でボランティアに関わり、地域の大人に支えられる経験をした学生たちは、自分が地域住民として年を重ねた時、次の世代を支える役割を担ってくれると思います。長いスパンではありますが、こうしてよい地域ができあがっていくのだと思いますので、これから先も10年、20年、30年と活動を続けていきたいと思っています。

野川　市の地域福祉計画と市社協の地域福祉推進計画が一体となった計画「なごやか地域福祉2020」でも、「地域で活動する多様な担い手を育む」とした柱のなかで、若者が継続的な活動につながることを支援しています。今後も学生同士の交流会や、マッチングイベントなどを積極的に行っていきたいと思います。

その際、学生を継続的な地域活動につなげるためのフォローを、大学VCと社協VCで一緒に取り組むことが大切だと思いますので、引き続き、よい連携をしていけたらと考えています。

吉岡　先ほど、学生5人に千種区社協のキャラクターをつくっていただいた話をしましたが、実は、そのうち1人が社協に、2人が行政に就職してくれました。名古屋市社協ではありませんが、とてもうれしかったですね。今後、ボランティア活動が大学で単位認定されたり、就職にプラスになったりするケースが増えるといいなと思っています。

私は、学生のボランティア活動は、最初は半分強制でもいいと思うのです。なかなか自発的に活動しようと思う学生は多くありませんから。まずは全員に体験していただき、そのなかの1割でも魅力を感じていただければいいと思っています。社協VCは、そうした学生をしっかりと受け入れ、楽しんだり学んだりしてもらう場を提供することが大切ですね。

今後も、多くの大学VCと連携しながら活動していきたいと思います。

熊谷　コロナ禍においても、やはり地域のVCとしては、何でも相談できるパートナーという存在でありたいとの思いが伝わってきました。

一方で、学生たちはコロナ禍の現在でも、地域のなかでさまざまな人々をつないでくれる、空白を埋めてくれる「かすがい」のような存在であるとのお話もあり、お互いに普段からよい関係をつくっておくことが大事なのだと感じました。

また、大学時代、地域の活動に関わってくれた学生が、社会に出て、また地域で活躍してくれているとのお話もあり、今、取り組んでいることは将来につながっていくのだなと実感しました。その意味でも、学生のボランティア・市民活動への参加がますます期待されます。

また、学生の声を丁寧に活動につないでいる大学VCの存在も非常に大きなものです。

ぜひ、この状況を一緒に乗り越え、将来につながる長いお付き合いをしていけたらと思います。

今後ともよろしくお願いします。

公開情報

日本司法支援センター「法テラスの電話等無料法律相談」実施（2021年9月30日まで延長）

法テラスでは現在、新型コロナウイルス感染症対策の一環として、期間限定で、弁護士・司法書士による「電話等無料法律相談」を全国で実施。実施期限が2021年9月30日までに延長。（詳細は「日本司法支援センター／法テラス」で検索）

Challenge

社会課題に挑む

本コーナーは、社会変化がもたらす、さまざまな社会課題を解決するためにチャレンジするボランティア・NPO、社会福祉施設などの事例紹介を通して、ボランティアの可能性と社協ボランティアセンターの役割を考えます。

第1回　大阪府大阪市　母子生活支援施設 リアン東さくら 学習支援と見守り活動「ひだまり」

施設紹介

運営主体：社会福祉法人みおつくし福祉会（大阪府大阪市）
定　　員：50世帯
開　　設：1972年

1972年に大阪市立東母子寮の受託運営を開始。大阪市の指定管理者としての受託運営などを経て、2019年から現在の「リアン東さくら」に名称変更。母子の自立を支援している。「リアン」はフランス語で「絆」を意味する“LIEN”と「笑っている」を意味する“RIANT”にちなんでいる。「絆」を大切に、一人ひとりが「笑顔」で生活し旅立ってほしいという支援者の「思い」が新しい建物となり「カタチ」になっている。

少年指導員
杉野 夏菜子（すぎの かなこ）さん

母子支援を通して広がる、地域の支援の輪と子どもの未来

「退所した母子が暮らしやすい地域をつくる」という思いで、地域への理解を広げる挑戦を続けているリアン東さくら。その支援の輪は着実に大きくなり、「ひだまり」は母子の現在と未来を支える地域の居場所として根づいています。

退所後の母子が暮らしやすい地域をめざし「ひだまり」学習塾を開設

リアン東さくらが「ひだまり」学習塾（以下、ひだまり）を開設したのは、2014年4月のことです。きっかけは、母子にとって暮らしやすい地域づくりをめざすリアン東さくらの理念に加え、母親たちから子どもの学習支援や見守りの継続を希望する声が多く寄せられたことにあります。そこで、民生委員・児童委員と協働し、地域住民のコミュニティ施設となっている「中本老人憩の家」で、毎週土曜日にひだまりを運営していくことになりました。会場をリアン東さくらとしなかった理由について、杉野さんは「地域に母子生活支援施設への理解を広める機会になり、それが母子の暮らしやすさにつながると考えました」と語ります。

「ひだまり」運営の会議に参加するメンバー

ひだまりを支える民生委員・児童委員の存在や、大学生ボランティアの成長

ひだまりが支援の柱としているのは「食」「学習」「居場所づくり」の3つです。「食」では、民生委員・児童委員が毎週おにぎりを用意するほか、月1回はカレーなどをランチとして提供しています。ひだまりの大きな特長は、民生委員・児童委員がリアン東さくらと両輪となって子どもと関わる点です。定期的に会議を行い、子どもの家庭環境や支援の目的を共有することにも努めています。「民生委員・児童委員の皆さんは、厚い人情を持った方ばかりで、子どもにとっても『信頼できる地域の大人』になっています」と杉野さん。

また、学習支援は大学生のボランティアが担っています。大阪市では、大学生のボランティア活動の経験が教員採用試験の際に評価される仕組みになっており、実際にひだまりで学習支援をしていた大学生が教職に就いた例もあります。ひだまりでは、大学生と一緒に活動の振り返りの時間を持ち、地域や子どもの状況を共有するとともに、子どもの関わりについて意見交換を行うことで、大学生が成長する機会となることもめざしています。

社協との連携から生まれるつながりやコロナ禍での支援

リアン東さくらでは、大阪市社協が実施する地域貢献事業にも積極的に参加しています。地域のほかのこども食堂とのつながりが生まれ、地域の子どもたちや母子世帯が抱える課題を共有することで、利用者への物資の提供など、支援の輪がさらに大きくなっています。

また、コロナ禍においては、大阪市ボランティア・市民活動センターのコーディネートにより、地域で生活する母子世帯への弁当配食に協力したり、プロの演奏家が子どもたちに音楽を届けるプロジェクトの紹介を受け、保護者含め20名が演奏を楽しみました。「市社協の幅広いネットワークの力により、子どもたちが貴重な体験をすることができました」と杉野さんは語ります。

子どもが未来を描くことのできる居場所をめざして

杉野さんは、これまでの活動で印象的な出来事として、中学3年間不登校でありながら、ひだまりに通い続け、学習支援を受けて高校に進学した子どもの存在をあげます。

「子どもたちから、人の可能性を信じ、つながり続けることの大切さを教えられています」と杉野さん。これからも、子どもが未来を描くことのできる居場所づくりに取り組んでいきます。

助成金情報

公益財団法人　太陽生命厚生財団「2021年度社会福祉助成事業」募集(2021年6月30日必着)

生活福祉分野で地域に根ざした活動を行っているボランティアグループ等（法人格の有無は不問）が実施する事業への助成を継続して実施。在宅高齢者または在宅障害者等に向けた福祉・文化活動を行うための費用を助成。（詳細は「太陽生命厚生財団」で検索）

必見！仕掛け人！ノウハウを学ぼう！

ボランティア・市民活動において、地域で多くの仕掛けづくりに取り組む皆さんの実践には、活動を進めるヒントや学びがたくさんあります。
第１回は、ボランティア団体・NPOの関心が高く、ボランティアコーディネーターに相談が寄せられることも多い「助成金申請」について、群馬県共同募金会の星野久子さんに申請のポイントを教えていただきます。

群馬県共同募金会
星野（ほしの） 久子（ひさこ）さん

初めて助成金申請をする、という団体さんがやってきた。の巻

相 談 者： 医療ケア児を育てるお母さん同士で、月に１回、食事会を開いている団体。

相談内容： 車いすやバギーの子どもを連れて集まれる常設の居場所を作るための助成金を申請したい。

1 本当に実現したいことってなんだろう？

「居場所を作りたい」という希望に対して、家賃補助が可能な助成金を紹介する（もしくは共同募金で助成する）ことも考えましたが、「助成金のその後」を考慮しました。事業運営には「固定費」と「臨時費」が必須ですが、「固定費を調達し続けること」はとても難しいことだからです。そこで私は、常設の居場所を運営している「先輩団体」を紹介し、そこを実際に訪問するよう促しました。それにより、自分たちがしたいことを具体的にイメージしてもらうことにしたのです。

その結果、相談者は、常につながるための「ネットワークづくり」に取り組むことを決意。「常設の居場所づくり」に必要な常駐スタッフの確保や、場所の経営に労力を費やすことで、肝心の「つながりづくり」が疎かになる懸念があったようです。「**本当は何がしたいのか**」。それを炙り出すこと（アセスメント）が、助成申請支援の要となります。「解決したい課題」を的確に捉えてさえいれば、手法や手段が多少あやふやでも軌道修正が可能です。しかし、課題の捉え方があやふやだと、いくら手段が立派でも課題解決にたどり着けないのです（と、尊敬する大先輩から教わりました）。

2 助成申請を通じて目標を可視化する

群馬県共同募金会では、申請者と一緒に「目標設定シート*」という書類を作成する過程で「本当にしたいこと」を炙り出し、言語化しています。申請者の多くは「困りごと」と「解決の目標」（＝やりたいこと）は直感的に書けますが、「目指す社会像」と「障壁・問題」が言語化できずに悩みます。社会像は「誰もが等しく幸せに」といった概念になってしまい、障壁は困りごとと重複してしまうことが多いです。目指すものが具体的でないと、障壁も具体化されないのです。課題解決とは、障壁を解消するためのさまざまな働きかけのことであり、助成金や寄付金もそこに期待して出されることを理解してもらうことが大切です。

3 助成を通じて団体の基盤強化を支援する

では、アセスメントの結果、「やっぱり常設の居場所を実現したい！」となった場合は、どのような支援が必要でしょうか。固定費がかかる以上、安定的な財源確保は必須です。事業実績がない段階で、立ち上がりを助成金で賄おうとするのであれば、団体としての信頼性を確実に示さなくてはなりません。そこで必要になるのが「会則」です。役員の選出方法や意思決定手順が明確化されているかがポイントです。例えば、団体内で意見が割れたときなどに、会則が確立されていれば、それに則って合意形成できますが、会則が確立されていないと空中分解しかねません。さらに確認すべきは、会の決算書と事業報告書です。決算書は、会計基準が異なる法人格・分野であっても横断的に客観比較ができる大切な書類で、「その会がお金にどう向き合っているか」が見て取れます。事業報告書からは「今、何を重視して活動しているか」といった、会の現在進行形のミッションを読み取ることができます。

いずれにしても、「助成申請のために」の支援ではなく、「助成申請を機に」会の運営を考えるよう促すことが大切です。

＊目標設定シートの構成

- 課題認識・解決の目標（困りごと／目指す社会像／障壁・問題／解決の目標）
- 事業実施内容・活動内容（取組内容／アウトプット）
- 目指す成果（中間アウトカム／最終アウトカム）

【ダウンロード用URL】
https://www.akaihane-gunma.or.jp/koiki_program/
※上記URL内で、組織基盤をチェックするための「自己点検表」も公開しています。

書籍紹介

『月刊福祉』2021年5月号(全社協出版部) 価格1,068円(本体971円)

特集は「地方分権と福祉」。変化し続ける社会保障・社会福祉制度の動向や課題を整理するとともに、多様な福祉課題への対応を、実践事例を交えながら多角的に紹介。(詳細は「福祉の本出版目録」で検索)

インフォメーション

イベント紹介

コロナ禍における各地のボランティア実践を学ぶ「オンラインサロン」を開催！

新型コロナウイルス感染症の拡大により、各地でボランティア活動の制限が続いた2020年5月、「広がれボランティアの輪」連絡会議など11団体が連携し、「未来の豊かな“つながり”のための全国アクション」（以下、つながりアクション）を始動しました。

つながりアクションでは、コロナ禍においても地域のつながりや支援が必要な人々との絆を保ち続けることをめざしています。これまで、さまざまな工夫で地域とのつながりを続ける全国各地の実践をホームページで発信するとともに、オンラインサロンを開催し、実践者同士の交流などをサポートしてきました。

コロナ禍の終息までは、まだ厳しい状況が続きます。つながりアクションでは、コロナ禍における実践や工夫を共有し、今後の活動づくりに役立てるため「拡大版オンラインサロン」を開催します。ぜひご参加ください。

概要

■ 動画のオンデマンド配信

2021年6月1日（火）から当面の間

- つながりアクションホームページに活動紹介動画を掲載

■ ライブ配信

2021年6月30日（水）　14時～16時

- 講演（上野谷加代子さん）
- 上野谷さんと実践報告者とのトーク
- 情報交換 ＆ 交流

詳細は　つながりアクション　で検索

読者のひろば

みなさんの声を活かした誌面づくりをめざします。

～ぜひ読者アンケートにご協力ください～

月刊『ボランティア情報』は、ボランティアコーディネーターやボランティア活動を推進する皆さんの、日々の活動に役立つ情報提供をめざし、1977年創刊以来、多くのボランティア・市民活動実践を紹介してまいりました。

今年度から、読者の皆さんの声をより一層活かした誌面づくりをめざし、読者アンケートを実施します。ぜひご協力ください！！

読者アンケートは、**記事の感想**をはじめ、**掲載を希望するテーマ**、**皆さんの職場や地域で取り組まれているお勧めの実践**などをご紹介ください。

今月の紙面の感想

私たちの地域の「この実践」をぜひ紹介したい！

etc...

下のQRコードを
携帯電話で読み込んでいただくと
アンケート回答記入フォームが開きます。

皆さまの声をぜひご記入ください！

次号の特集は（予定）

「コロナ禍での災害ボランティアセンター運営について」

2020年7月に発生した豪雨災害では、新型コロナウイルス感染防止対策から、被災地域や被災県内のボランティアを中心とした活動が行われました。また、災害ボランティアセンターでは感染拡大を防ぐさまざまな工夫がなされました。

次号の特集では、コロナ禍で災害ボランティアセンターの運営に携わった被災地の市町村社協の取り組みを紹介し、感染症対策下での災害ボランティアセンター運営について考えます。

ボランティア情報 2021 no 527
社会福祉法人 全国社会福祉協議会
全国ボランティア・市民活動振興センター
〒100-8980 東京都千代田区霞が関3-3-2 新霞が関ビル TEL.03-3581-4656 FAX.03-3581-7858
E-mail vc00000@shakyo.or.jp URL https://www.zcwvc.net/
発行人●松島 紀由 編集人●高橋 良太 制作●株式会社トライ 定価●¥110（税込）※購読料は会費に含む